

セカンド ID

アイデ
ィ

「本当の自分」に出会う、
これからの時代の生き方

小橋賢児

Kenji Kohashi

きずな出版

「セカンドID」が、人生の可能性を広げてくれる

いまから約10年前、マイアミで見た世界最大級のダンスミュージックフェスティバル「ULTRA MUSIC FESTIVAL」の光景は、いまでも昨日のこのように鮮明に覚えている。

青空の下、巨大なLEDのスクリーン、最先端のダンスミュージックという共通言語を通じて、世界中の人々がエネルギーを交換しあっていた。

我を忘れて踊り続ける人、夢にまで見た景色を目の前にして泣いている人、

それらの素晴らしい光景を見ては歓喜している人……。まさに僕自身がそのひとりだった。

それから5年後、ひとりの観客だった僕が、日本では不可能といわれた、このダンスミュージックフェスティバル「ULTRA JAPAN（※1）」のクリエイティブ・ディレクターとして、舞台袖に立っていた。

いまや毎年10万人以上の人たちが、そのステージに熱狂してくれている。我を忘れて大観衆が音楽を通じてひとつになる。

そんな光景を見るたび、イベントという非日常空間は、いつもの自分の殻を脱いだ「本当の自分」をさらけ出せる場として存在していることに気づく。

8歳のとき、1枚の勘違いのハガキがきっかけで俳優になり、27歳のとき、突如休業して世界をまわる旅人へ。

※1

ウルトラジャパン。マイアミが発祥の世界最大規模のダンスミュージックフェスティバルの日本版。会場はお台場で、一度に10万人以上を動員する。

30歳手前で職を失い、恋人にも逃げられ、病気になる、すべてを失った僕は、死の淵をさまよって人生のどん底を経験した。

そこからたった3年で映画監督になり、「ULTRA JAPAN」のクリエイティブ・ディレクターにもなった。そして、いまは「STAR ISLAND^(※2)」という未来型花火エンターテインメントや、キッズパーク「PuChui^(※3)」などをプロデュースしたりもしている。

このように、僕はこれまでの人生でさまざまなアイデンティティに出会ってきた。しかし、それらのどのアイデンティティも、僕自身が目指していたものでも、強く願っていた夢でもない。その場で感じたこと、そのときにできることを一つひとつやった結果、気づくとできた未来だった。

幼い頃、世界はまだアナログで、いまの時代のように情報がどこでも誰でも手に入るわけではなかった。雑誌や新聞、マンガやテレビ、そしてリアルな場がエンターテインメントのすべてだった。

そこから、時代はデジタル化に向かって加速していき、ちょうど僕が思春期を迎える頃になると、ポケベルや携帯電話というアイテムが登場した。

そんなものをひとつずつ手にするたびに、自分のワクワクする情報を捉え、掴むことに熱狂したものだった。

現代はというと、便利になった一方で、本当の「夢」や「目標」がづくりにくいのではないかとも思っている。

情報化が進み、いつ、どこにいても世界中の情報にアクセスできる反面、情報ばかりが先行し、実際に体験せずともやった気になってしまう。

“夢にできそうなこと”がそこら中にあふれ、目移りし、僕らをまどわす。

※2

スターアイランド。花火、3Dサウンド、最先端テクノロジー、パフォーマンスが融合した、未来型花火エンターテインメント。

※3

プチュウ。横浜駅直通アソビル4Fに2019年5月にオープンした完全予約制のキッズパーク。

先人たちがつくった「夢の結果」をいつでもどこでも見られてしまうおかげで、たしかに目標や指標はつくりやすい。ただ逆に、見えないことへのチャレンジや、先行きのわからない方向へ向かうことが難しい時代ではないかと僕は思う。

僕は夢も目標も何ももっていないなかった。もてる余裕すらなかった。

しかし「自分は〇〇になりたい」と夢を掲げ、それだけを目指していたら、いまの自分にはなれていなかったのではないか、と思っている。

僕はたまに山登りをする。

高い山を登るとき、山の頂上を見上げて考えるのは、「頂上に登ったときの景色の心地よさ」だ。

決して「登ったことを誰かに自慢する」わけではなく、「誰かを見下ろす」

ためでもなく、ただ頂上からの景色と自分の心地よさにひたった妄想だけ。

そして、最初に想像だけしたら、山登りをしているあいだはできるだけ頂上を見ないようにする。頂上を見てしまうと「まだか……」と、自分との距離の差に心が打ち砕かれてしまうし、疲れてしまうからだ。

一歩一歩、足元を見ながら「いまこの瞬間」にフォーカスし続けると、気づいたら、クライマーズハイというか、我を忘れるゾーンの状態に入ることがある。

そこでは、先ほどまで怖かった崖が、まるで自分の身体の一部かのように感じ取れて、すすいと登れてしまう。

そして、気づくと山の頂上に着いていたり、あるいはその先に隠れていたもっと素晴らしい景色に出会うことがあるんだ。

もしかして人生って、この山登りみたいな感じなのではないだろうか。

どんな小さな山でもいい。

最初にその山の頂上に立ったときのことを想像して、ワクワク感だけに集中し、あとはそこに縛られることなく、一步一步確かに進む。

途中、打ち碎かれそうなことや困難な目にあっても、最初のワクワクした気持ちに立ち返る。すると、見えなかった景色が徐々にひろがり、思ってもみなかった場所へたどりついてしまうことだってある。

僕自身、最初から「日本一のフェスのディレクターになるぞ!」「映画監督になるぞ!」「社長になるぞ!」なんて、思っていたわけではない。

山登りと同じように、そのときに置かれた環境を受け入れ、自分のできる範囲で一步一步、大切にやったからこそ、未来が勝手にできあがっていった感じ

なんだ。

鍵っ子だった普通の少年が、ひよんなきっかけで俳優という華やかな世界に入ったが、30歳を目前にすべてを失い、夢も希望ももてなかった。そんな僕が10万人を集めるフェスのクリエイティブ・ディレクターになれたように、僕らの未来は、いまこの瞬間から網の目のように変わる可能性を秘めている。

最近はオンラインサロン、ワーキングなど、国家や大きな組織を超え、これまでになく新たな価値観をもった小さなコミュニティが、次々と立ち上がっている。

日常とは違うもうひとつのコミュニティに参加することで、職場や学校では出会うことのなかった人々に出会う。

そこで自分だけではできなかったことにチャレンジすると、いままで気づか

なかった、あるいは忘れてしまっていた「もうひとりの自分のID＝アイデンティティ」に気づくことがある。

また、人生の転落や偶然の出会い、生きている中で起こるさまざまな想定外の出来事から、それまで知らなかった「もうひとりの自分」というアイデンティティに出会うこともある。

その、もうひとつのアイデンティティのことを、僕は「セカンドID」と呼んでいる。

僕らはまだまだ人生という名の旅の途中。

この多様化した世界で、もうひとつの自分のアイデンティティ、つまり「セカンドID」をもつことが、人生の旅をさらに楽しくしてくれる秘訣なんじゃないかと思う。

この本は、自己啓発本でも、ビジネス本でもない。

僕がいままで出会ってきたリアルな事実と、ちょっとした不思議な出来事をみなさんと共有して、自分にも起こり得る可能性として重ねてもらえたら、それだけで本望。

それらにつながる話をするために、ちょっとだけ僕の過去の物語におつきあいいただければと思う。

そして、この本があなたの「セカンドID」をつくるきっかけづくりに役立てば、これ以上うれしいことはない。

小橋賢児

A black and white photograph of a large crowd at a night concert. In the background, a stage is illuminated with bright lights. The crowd is dense, and many people are holding up their phones to capture photos or videos. In the foreground, there are large speakers and some staff members wearing vests that say "STAFF 2015 ULTIMATE".

セカンドID
「本当の自分」に出会う、これからの時代の生き方

Contents

Chapter
1

セカンドIDは、 僕たちの経験の中に

- ・すべては勘違いから 022
- ・いまある環境をあるがままに楽しむ 024
- ・もうひとつの「居場所」が自分をつくる 031
- ・最初で最後の大きな夢 036
- ・ただ、目の前のことに夢中になる 040
- ・捉え方によって、景色は変わる 042

Chapter
2

ゼロになることを恐れない

- ・「僕は○○だから」に縛られない 048
- ・遅咲きの自分探しも悪くない 051
- ・「人間力の違い」を見せつけられた日 056
- ・思いつきり泣いたっていい 062
- ・行動は誰にでもできる錬金術 064
- ・劣等感しかなかった、ボストンでの生活 069
- ・「ULTRA」との出会い 072
- ・徐々に死にゆく自分 080

SECOND

Chapter

3

3 本当の自分を解放しよう

- ・「死」を受け入れ、あえて開き直る 086
- ・強制的に環境をつくってしまう 090
- ・誰でも、3か月本気でやれば変わる 094
- ・後先考えず飛び込んだことで、未来が拓けた 097
- ・DON'T STOP !! 105
- ・「ULTRA」は日本で開催できるのか？ 111
- ・「場」は気づきのきっかけとなる 123

Chapter

4

人生は「想定外」に出会うことで広がっていく

- ・あえて一度、リセットをする 130
- ・バックパックひとつで、3か月間のインド生活 133
- ・10日間の瞑想で、自分と究極まで向き合う 135
- ・日常に「想定外」を 141
- ・トラブルもゲームのように 144
- ・伝統への疑問と「STAR ISLAND」の発想 146
- ・その選択が正解か不正解かなんて、わからない 158
- ・全人類クリエイターへ 162

Chapter

5

セカンドIDをもって、 本当の自分とつながる

・「中道」～極を知り、中に気づく～ 166

・「Have to」か「Want to」か 169

・セカンドID 175

あとがき 178

セカンドID ―「本当の自分」に出会う、これからの時代の生き方

SECOND

Chapter 1

セカンドIDは、
僕たちの
経験の中に

すべては勘違いから

芸能界に入ることになったきっかけは、たった1枚の「勘違いのハガキ」からだ。

僕は子どもの頃、畳の床が抜けネズミがいつもはっているような、その時代ではめずらしい戦時中から残っているボロ家で育った。

両親は共働きで、ずっと鍵っ子だったが、その生活に不満をもったことなど一度もなかった。

8歳のとき、ウッチャンナンチャンさんや高田純次さんが司会を務める「パオパオチャンネル^{※4}」という子ども番組が、平日の夕方に放送されてい

て、その番組が好きで毎日観ていた。

ある日「新レギュラー募集中」というテロップが番組の冒頭で流れたのだが、子どもだった僕は、「レギュラー」という言葉の意味がわからず、勝手に「観覧希望のお知らせ」だと勘違いしてしまった。

好きな番組だったので、「この番組を生で観られるチャンス」と思い、テレビの前に座ってメモを取ろうとしたけど、早くて間に合わず……。それならばと、すぐにVHSを用意。番組の最後に再度テロップが流れたので「よし!」と思って、録画のボタンを押し、無事、応募方法をゲットすることができた。その後、家にあったハガキを勝手に使い、テロップに書いてあった必要事項を書き、ポストに投函した。

すると、それから約1週間後「オーディションのお知らせ」と書かれた1枚のハガキが送られてきた。

母親から「あんなになんか届いているよ? 何かしたの?」と言われても、

※4

テレビ朝日ほかで放送されていたバラエティ番組。1987年10月19日から1989年9月29日まで放送。

Chapter 1

セカンドIDは、僕たちの経験の中に

またもや「オーディション」という言葉の意味がわからなかった僕は、何のこともだかさっぱり。母親に確認してみると、どうやら合格したらそのテレビに出られるということがわかった。

「本当は番組を観に行きたかったのだけど、番組に出られるんだっただけでいいじゃん……!」

子ども心に素直にそう思い、後先なんて考えずオーディションを受けることを決めたんだ。

いまある環境を あるがままに楽しむ

オーディションが何なのか、よくわからなかったけれど「最初のオーディ

ションだけ連れていってくれたら、あとはひとりで行くから!」と母親にお願いし、一緒にオーディション会場へ行く約束を取りつけた。

幼い頃から決して裕福とはいえない家庭環境だったし、「芸能界は水商売」という古風な考えをもった両親だったので、もちろん芸能界入り自体は反対だった。それでも連れていってくれたのは、まさかオーディションに合格するとは思っていなかったからだったようだ。

オーディション会場は、数百人という子どもで埋め尽くされていた。

なかには、すでに事務所に所属している俳優のたまごのような子もたくさんいて、控え室では慣れた様子で自己紹介の練習をしていた。

そんな彼らを横目に「とにかく面白いことを言えればいいだろう」と、なぜか勝手に思い込んでいた。

Chapter 1

セカンドIDは、僕たちの経験の中に

そして、いよいよ自分の番がまわってきた。

「『顔から■が出るほど恥ずかしい』——この■の中に言葉を入れなさい」

こんな問題が出されたのだが、そこで「顔からウンコが出る！」と、小学2年生ならではの渾身のギャグで面接官たちを失笑させ、その場を立ち去った。

この無謀な感じが功を奏したのか、オーディションに来ていた総数1500人以上の中から、最終16人に選ばれてしまった。

そして「このあとは、16人全員のプロモーションムービーを撮影し、視聴者の投票によって7人に絞られる」ということを、そのとき知らされた。

「7人に絞られるってどういうこと？」と母親に聞くと、「お客さんからたく

さんハガキが届いた人が、合格するんだよ」と話してくれた。

それを聞いて「なるほど、ハガキがいっぱいきたら受かるのか！」と思った僕は、家や近所でかき集めた空き瓶を酒屋にもっていった。

というのも、当時は酒屋に空き瓶をもっていくと、ひとつ5円から10円で引きとってもらうことができたからだ。それで交換したお金で、なんとか20枚程のハガキを手に入れたんだ。

そして、勝手に友達の名前を借りて自分へ投票するという策に出た。

といっても、小2レベルで友達の数なんてたかがしれている。

早々と友達の名前を使いきってしまったあとは、ついに「織田信長」「豊臣秀吉」という歴史上の人物の名前を書きはじめ、それらを差出人として自分へ投票した。

Chapter 1

セカンドIDは、僕たちの経験の中に

いま思えば、何枚も同じ消印の、同じような子どもの字体のハガキなんて、明らかに自分で投票しているとバレバレだったと思う。でも、そんなことまで頭がまわらない小2の無邪気な子どもは、まさに真剣そのものだった。

投票の期間になると、毎日ディレクターに「僕、受かりましたか?」「いま、どんな感じですか?」としつこく電話をかけまくった。ディレクターも最後のほうは呆れていたはずだ。

そして「合格したよ!」と連絡をもらったときは本当にうれしかった。

それと同時に「小橋くん、自分で20枚投票したみたいだけど、そんなレベルじゃないくらい、君へのハガキは集まっていたから大丈夫だよ」と笑って言われたことで、初めて自分のしたことをちょっとだけ恥ずかしく思った。

いままで家で観ていたテレビの世界に自分が出演するという感覚は、意外に

もそれほど「すごい!」という感じではなかった。

ただ単に番組に参加できて楽しかったし、わずかだけお小遣いをもらえるってことがうれしい、くらいの感覚だった。

でも、初めてもらったギャラで家族をステーキ屋さんに連れて行ってあげたときは、幼いながらも「親孝行ができてうれしい!」と素直に思えたことを、いまでもはつきりと覚えている。

そして、なによりも「学校以外に、自分の居場所がもうひとつある」ということが、刺激的だった。

週に一度、学校が終わると、ひとりでバスに乗り、電車へ乗り換え、テレビ局へ向かう。

移動中は、いかにも疲れ切ったサラリーマン、ガン黒でイケイケなギャル女子高生、これでもかかってくらい髪の毛を巻き上げたバンドのおっかけ風な人な

ど、学校とは違う多様な人間模様が垣間見られた。とにかく刺激的で、飽きる
ことがなかった。

現場では司会の高田純次さんをはじめ、番組を制作するスタッフさんの仕事
など、日常とは違う新しい世界を知ることができた。

きつとそのとき幼いながら見たリアルな光景が、いまの自分をつくってい
く要素にもなっているんだと思う。

学校とテレビ局という別々の環境を行き来することが当たり前になっても、
仕事も学校もない日はひとりで河原へ行き、草野球をしている知らないおじさ
んたちに話しかけ、一緒にまぜてもらうなんてこともしょっちゅうだった。

こんなふうに後先も考えず行動できた理由は、無知な子どもだったことと、
共働きだった両親に何かを確認する間もなく「行動するしかなかった」という

ことが影響していると思う。

とにかく貧乏だったけれど、その生活を恨んだことなんて一度もなかった。

当時は、いまみたいにインターネットですべての世界が見えるわけでもな
く、他の何かと比べる術がなかった。だからこそ、いまある環境があるがまま
に楽しむ、ただそれだけだったんだ。

もうひとつの「居場所」が 自分をつくる

思春期になると、当たり前前に恋もしたし、異性を意識してカッコいいジーン
ズやスニーカーを履きたいと思うようになった。

しかし、うちには好きなものを自由に買ってもらえるような余裕もなかった

Chapter 1

セカンドIDは、僕たちの経験の中に

032

ので、「あきらめる」か「自分で何とかする」という二択しかなかった。

そのとき、小学生がタスキをかけて新聞配達をしている、あるマンガをふと思い出した。

そして「そうだ、新聞配達なら僕もできるかもしれないぞ!」と思い、小さな希望とワクワク感をもって、分厚く黄色い情報誌のタウンページをめくり、近所の新聞屋さんに電話をしまくった。

いま考えれば、14歳という年齢を聞いてバイトをさせてくれるところなんてあるはずもないとわかるけれど、そのときはそんなことは関係なかった。

たとえ門前払いをくらっても「これは難易度の高いゲームだ!」くらいの感覚で、電話をかけることをやめなかった。

そして、最後の新聞屋さんに電話をしたところ、「ちようど辞める人がいるから、明日から早速来てほしい」と言ってくれ、アルバイトにこぎつけること

ができたんだ。

そうやって、自分がやりたいことに向かって一生懸命行動すれば、かならずそれは手に入るということを、小さい頃から無意識におこなっていたのかもしれない。

ちなみに、僕が通っていた中学校は地元でも有名な、俗にいう“荒れた”中学校だった。

『ビー・バップ・ハイスクール(※5)』みたいな日常だったので、僕もそれなりにグレたりした。そんな奴がまじめに新聞配達なんてしている姿を、学校の友達には恥ずかしくて見せられなかった。

だから誰にも会わないように深夜2時に新聞屋さんに向かい、部活に向かう人が登校する前の6時には配達を終えて自宅に戻り、そこから急いで部活に行く——というハードな生活を1年以上も続けた。

033

※5

きうちかずひろによるツッパリ高校生を題材にしたマンガ。1983年から2003年まで『週刊ヤングマガジン』(講談社)で連載。

Chapter 1

セカンドIDは、僕たちの経験の中に

また当時、原宿には「テント村」という、屋台のような簡易的に設置された店がたくさん並んでいて、非法法のアイドルグッズや偽物のブランド品などがたくさん売られていた。

僕はその入り口にあったアクセサリー屋さんのバイト募集の看板を見て、1個4円で袋詰めをする内職の仕事もやった。

さらに、駅前には「10枚1000円〜10枚1000円〜」と、大量の偽造レカを売っている怪しい外国人がいたり、12歳からアメリカへ古着やスニーカーをひとりで買い付けに行ってしまうほど超スニーカーマニアのお兄さんが、レアもののスニーカーの話をしてくれたり、はたまた超バブルな医者のおじさんたちの合コンにまぜてもらったこともあった。

いま思えば、その体験すべてが、ヘタなドラマよりもヘンテコで面白く、いろいろな角度から刺激を受けていた。

当時はちょうどバブルもはじけ、アナログからデジタルへ、ポケベルから携帯へ、DCブランドからストリートファッションへ、ヤンキーからチーマーへと、いろんなものが目まぐるしく転換していくような時代。

そんな時代の過渡期の真ただ中で、とにかく新しい体験をしたいという思いで不良グループとつるんだりしたこともあった。

でも、彼らと悪いことをしたかったわけではなく、彼らのファッションや音楽などに対する感度の高さに、ただただ刺激をもらいたかったんだ。

そうやって、自分がいる場所以外の環境に行き、新しい刺激を受けては変化していく感覚は、僕にとって日常生活の一部だったし、それこそが「セカンド

「ID」の原点だったように思う。

最初で最後の大きな夢

小学生の頃の夢は、宇宙飛行士だった。

「宇宙飛行士になりたい。だけど、人がつくったロケットには乗りたくない。だから、自分でロケットをつくって、それで宇宙へ行くんだ」

子どもの頃からあまのじゃくだった僕は「人のつくったロケットなんて乗りたくない!」と思い、学校帰りに近くの工場に寄り道して、落ちていたネジや

ボルトを拾って集め、本気で自分でロケットをつくろうとしていた。

いま考えると、僕が「大きな夢」を掲げたのは、これが最初で最後だったような気がする。

もちろん「野球選手になりたい」とか、男の子なら誰もが一度は口にするようなことを言っていた時期もあったけれど、あそこまで大きな夢を口にしていたのは、後にも先にもこれだけだったと思う。

その数年後、はたから見れば夢のような「テレビ」という世界に出演することになったけれど、決して願っていた夢を追いかけてそうなったわけではなかった。

芸能事務所のようなところへ所属するも、1年間で100回以上もオーディションに落ちるという現実の中では、将来に何も期待することなどなかったんだ。

Chapter 1

セカンドIDは、僕たちの経験の中に

Chapter 1

セカンドIDは、僕たちの経験の中に

しかし、中学校3年生の夏に受けたオーディションに合格したことで、生活は一変することになる。

当時、社会現象にもなった「人間・失格」といえばよく死んだら（※6）というドラマに抜擢され、それを機に、1日に段ボール2箱分ものファンレターが届くような状態になった。

めまぐるしく変わっていく環境の中で、自分自身を客観的に見ることも、将来のことを考える余裕すらなかった。

テレビや雑誌のインタビューで「将来の夢は何ですか？」と聞かれても、いまを生き抜くのに必死で、夢なんか語ることすらできずにいた。というよりも、本当は夢の意味すらわかっていなかったんだ。

思いとは反対に、当時テレビのCMや雑誌の広告にはどこもかしこも「夢をもとう!」「夢をつかもう!」というワードであふれていた。

夢というものの自体にピンときていないまま青春時代を過ごしていた僕からしたら、そんな煌びやかな広告を見るたびに、居心地の悪さを覚えていた。

はたから見れば、芸能人になって、成功して、夢を叶えたように見えていたかもしれない。

しかし、決してなりたいた自分の姿になっていたわけではないし、まわりを見渡せばすごい人ばかりで、むしろ、いつも心のどこかで不安と自信のなさが混在していたんだ。

※6
1994年7月からTBS系の「金曜ドラマ」枠で放送された日本のテレビドラマ。脚本は野島伸司。

ただ、目の前のことに夢中になる

「勉強して、いい学校だけは出ておきなさい」

芸能界に染まっていく僕を見かねて、教師をしていた母親はいつもこう言っていた。「いい学校さえ出ていれば、どんなことがあっても安心だから」と。しかし、あいかわらずあまのじゃくな僕は、その言葉にいつも違和感を抱いていた。

なぜなら僕のまわりには、たとえば学校を出ていなくても、面白い人たちがた

くさんいたからだ。彼らはすごく物知りだったり、努力家だったりすることを知っていたので、学歴がすべてとは思わなかった。

そして彼らは「これからこんなものが流行る」というアンテナを常に張っていて、その予想はことごとく的中していた。

彼らのそんな話を聞くことが大好きだったし、彼らの発想やアイデアに刺激を受け、尊敬していた。

だからこそ、母親から「いい学校に行きなさい」と言われるたびに、逆に「将来の安心のために、いまを選択したくない！」と反発してしまっていた。もちろん、そこへ導こうとしてくれた親には感謝しかない。

でも、いい学校を出るよりも、自分が興味のあるものを追いかけていくうちに、気づいたらそれが自分の目的になっていた、という感覚が、本来の夢の姿のような気がしたんだ。

実際に、30歳を目前にして死の淵をさまよい、再起を果たした後も「大きな夢をもとう」なんて到底、思えなかった。大きな夢を掲げてしまうと、その夢までの距離が遠すぎて、傷つくことを直感的にわかっていたから。

目の前にあることや出会いを一つひとつ紡いでいくしかできなかったし、いまだに「いまの夢は？」なんて聞かれてもピンとこない。

だからこそ、自分がいま置かれている場所の中で、楽しいと思うことだけをがむしゃらに追いかける、ただそれだけでいいと思うんだ。

捉え方によって、景色は変わる

「昔はよかった」

「若いんだから、何だってできるだろ」

「いまの日本はダメだ」

20代の頃、そんな言葉をよく聞いた記憶がある。

まだ俳優をしていた頃、飲み会の席などでそんなことをよく言われていたけれど、結局なんて返せばいいかわからなかった。

それから10年経ったいまも、同じように大人たちは世の中を嘆いている。

たしかに、政治の世界を見ても大人同士が揚げ足を取り合い、罵り合^{ののし}ったりする光景をよく目にするが、そんな世の中でどうやってリスクをもってチャレンジしようと思えるだろうか。

過去を見渡せば、昔でできたことがいまはできず、世界を見渡せば、世界では

Chapter 1

セカンドIDは、僕たちの経験の中に

できるのに日本ではできないことが多い。そんな中で、どう希望を見出せるというのだろうか。

気づいたら、知らず知らずのうちに、相手に合わせてしまう自分。
空気を読みすぎて、逆に空気のような存在になってしまっている自分。

僕自身もそんな自分に苛立ちを抱えていた時期もあったけれど、楽しいことに会おうチャンスも日常に転がっていることを忘れてはいけないと思う。

つまり、自分がその環境をどう捉えるかが重要であり、捉え方次第でその先の景色が変わる可能性はいくらでもある。

日常生活の中では、何も考えず無意識にルーティンでおこなっているものが誰でもひとつやふたつくらいあると思うけれど、たまにはあえてまったく違う方向へ進んでみてほしい。

人生にワクワクが見つからないのは、自分の枠から出ていないから。

たとえば、苦手だと思っていた人と話してみたり、あまり話していなかった親父と盃を傾けるでもいい。

そうしていつもの枠から外れることで、いままで気づかなかったこと、見たことのない景色が見えてくることがある。

その瞬間は大した景色じゃないように思えるかもしれないけど、やがてその景色が「内からの気づき」につながる。

そして、その内からの気づきが、新しい思考や目的を生み、それこそが自分だけの「セカンドID」につながるんだ。

続きは、本編でお楽しみください



セカンドID

小橋賢児 著

Amazonで購入する >